

平成12年度

教育研究員研究報告書

学 校 保 健

東京都教育委員会

平成12年度 教育研究員「学校保健部会」名簿

[第 1 分 科 会]

所 属 校	氏 名
江 東 区 立 南 陽 小 学 校	石 坂 泰
世田谷区立太子堂小学校	久保田 みどり
日野市立平山台小学校	◎ 丸 山 幸 江
西 東 京 市 立 中 原 小 学 校	南 谷 敦 子
墨 田 区 立 向 島 中 学 校	山 崎 直 華
目 黒 区 立 第 二 中 学 校	瀬 谷 洋 子
練 馬 区 立 中 村 中 学 校	三 崎 暁 美
多 摩 市 立 落 合 中 学 校	伊 藤 康 代
都 立 農 芸 高 等 学 校	中 澤 理 恵
都 立 富 士 森 高 等 学 校	○ 相 馬 孝 衣

[第 2 分 科 会]

所 属 校	氏 名
新宿区立四谷第三小学校	井 上 亜 由 子
台 東 区 立 田 原 小 学 校	◎ 熊 井 英 子
練 馬 区 立 練 馬 東 小 学 校	三 浦 悦 子
国立市立国立第七小学校	○ 岩 渕 美 香
千代田区立麴町中学校	杉 本 法 子
北 区 立 飛 鳥 中 学 校	丸 山 か よ
小平市立小平第四中学校	弥 永 美 保
都立市ヶ谷商業高等学校	平 川 智 恵
都 立 紅 葉 川 高 等 学 校	安 藤 芳 江

(◎ 世話人 ○ 副世話人)

目 次

序 章 研究の概要

学校保健部会全体主題

生涯を通じて健康な生活を送ることができる児童・生徒の育成

－実践力を育てる性教育の展開と指導の工夫－

I 主題設定の理由	1
II 研究の全体構想図	2
III 研究の経過	3

第1章 豊かな人間関係をはぐくむための指導の工夫（第1分科会）

I 主題設定の理由	4
II 研究のねらい	4
III 研究の方法	4
IV 研究の内容	5
1 調査研究	5
2 授業研究	8
3 指導の工夫	8
4 実証授業Ⅰ（小学校、学級活動：保健指導）	10
5 実証授業Ⅱ（中学校、学級活動：保健指導）	12
6 実証授業Ⅲ（高等学校、ホームルーム活動：保健指導）	14
V 研究の成果と今後の課題	17

第2章 互いに認め合い大切にしようとする意識を育てる保健室相談活動の工夫 （第2分科会）

I 主題設定の理由	18
II 研究のねらい	18
III 研究の方法	18
IV 研究の内容	19
1 調査研究	19
2 実践研究の視点	22
3 保健室の相談機能を子どもたちに周知する実践	24
4 相談活動の実践	26
V 研究の成果と今後の課題	31

終 章 研究のまとめと今後の課題	32
------------------	----

序 章

研 究 の 概 要

<学校保健部会全体主題>

生涯を通じて健康な生活を送ることができる児童・生徒の育成

－実践力を育てる性教育の展開と指導の工夫－

I 主題設定の理由

平成14年度から全面実施される新学習指導要領（高等学校については平成15年度より学年進行）は、今年度より移行措置期間に入った。新しい教育課程の編成に向けて、各学校では様々な取組が行われている。平成10年7月の教育課程審議会答申で体育・健康教育の充実が改善の柱の一つとして取り上げられたことを受け、新学習指導要領では小学校中学年から保健に関する内容を指導することになるなど、ヘルスプロモーションの考え方を生かし、生涯を通じて自らの健康を適切に管理し、改善していく資質や能力の基礎をはぐくむことが求められ、特に実践力を育成することの重要性が言われている。

一方、今日の児童・生徒を取り巻く様々な健康課題の中でも、性にかかわる様々な課題に対して適切に対処できる資質や能力をはぐくむことは、生きる力の基盤であり、生涯を通じて健康な生活を送るために不可欠のことである。児童・生徒が性にかかわる課題を、自らの生き方の問題として考えていくことのできる性教育を充実していくことが大切である。

このような状況を踏まえ、学校保健部会では、副主題として「実践力を育てる性教育の展開と指導の工夫」を設定し、児童・生徒の実態や発達段階を踏まえた研究を進めるため、従来の校種別分科会構成から、小学校、中学校、高等学校の各校種の研究員合同による分科会を構成し、研究を進めた。

第1分科会は主に保健指導・保健学習など授業の場における工夫・改善を目指し、第2分科会では、保健室の機能や養護教諭の専門性を生かした個別指導・グループ指導における工夫・改善を目指した。

各分科会ごとの主題は下記のとおりである。

<第1分科会>

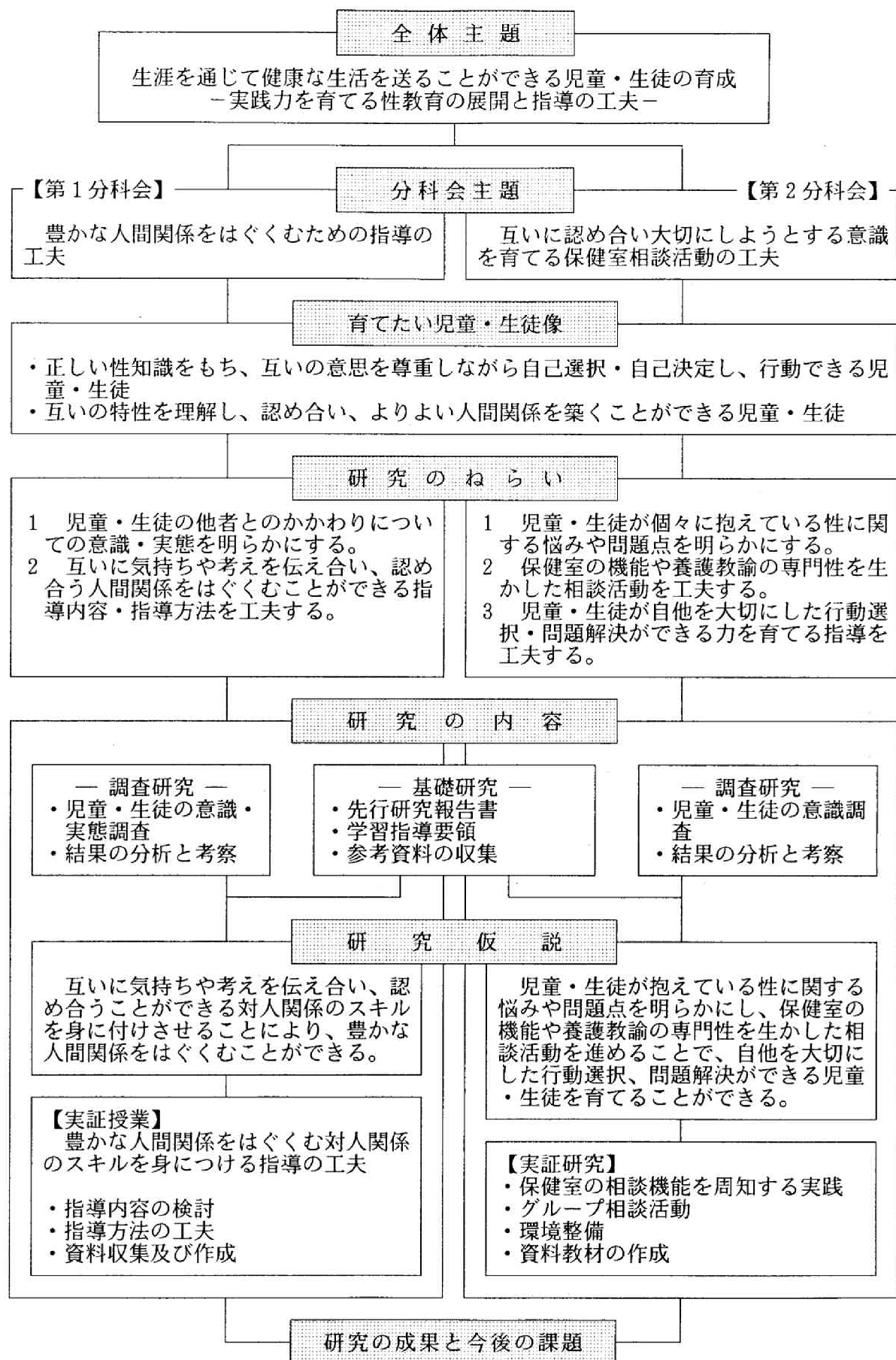
豊かな人間関係をはぐくむための指導の工夫

<第2分科会>

互いに認め合い大切にしようとする意識を育てる保健室相談活動の工夫

※ 本報告書では、児童・生徒と子どもたちをほぼ同等の文言として用いている。
これは、今回の分科会構成の特徴により、一方に統一することが文全体にそぐわない部分が生じたことによる。

II 研究の全体構想図



Ⅲ 研究の経過

4月	教育研究員総会・分科会構成 研究組織づくり、役割分担 研究計画の検討、分科会主題の検討
5月	分科会主題の決定 研究内容・方法の検討
6月	研究全体構想図の検討 調査研究の検討
7月	研究全体構想図の検討 調査研究の実施
8月	実態調査結果の分析・考察 指導計画・指導案の構想・検討 実証授業・実証実践の計画
9月	指導案の作成、教材・資料の検討 実証授業（中学校） 保健室相談活動実践の準備
10月	実証授業（小学校・高等学校） 保健室相談活動における実証研究 実証授業・研究の分析・考察
11月	研究のまとめと報告書原稿の作成
12月	研究報告書原稿の検討・完成 研究発表会の構想・検討
1月	研究発表会の検討・準備
2月	研究発表会 研究のまとめと課題の確認

第 1 章

＜第 1 分科会主題＞

豊かな人間関係をはぐくむための指導の工夫

I 主題設定の理由

今日、児童・生徒を取り巻く社会環境は、急激に変化している。携帯電話やインターネット等の高度情報技術の普及が、これまでとは比較にならない程多様なコミュニケーション手段を私たちにもたらし、情報の取り入れ方や対人関係の在り方に大きな影響力と変化を与えている。しかし、このことは私たちに必ずしも豊かな人間関係をもたらしていることにはならず、家庭では少子化や地域社会との関係の弱体化などにより人間関係の希薄化が進んでいる。

このような状況にあって、10代の性交経験率は高まりをみせ、それに伴い性感染症や人工妊娠中絶、売買春の増加が懸念されてきている。これは、情報化の進展と相まって人間関係の希薄化が社会全体の風潮として進む一方で、子どもたちが対人関係のスキルを直接的に実感したり、体験したりする機会が減り、性の課題に適切に対処できる力を身に付けられないまま安易な行動をとった結果と考えられる。

児童・生徒の現状を見ると、小・中学校、高校のそれぞれの段階において、他者とのかわり方が未熟なために、自分の考えを十分に伝えることができず、相互に傷つくような結果を招いてしまっている状況がある。

本来、人は人とかかわりながら、自尊感情・自己肯定感・信頼感・有用感をもつことができ、自分と他者をかけがえのない存在と認め、自他をも大切にしようとする感情が育つと考えられる。互いをかけがえのない存在と認め、自己の理解と他者の理解ができる対人関係を築きながら、自分の考えを修正し、相互を大切にできる賢明な選択と行動ができる児童・生徒を育てることが、私たちの課題である。

男女間においては、性にかかわる課題が生じた時に、互いの身体的・心理的・社会的な自己認識と他者認識を深めながら、自他を大切にできる自己決定をし、適切な行動を選択することが望まれる。

そのためには、男女が対人関係のスキルを高め、互いの気持ちや考えを伝え合い、認め合うことのできる豊かな人間関係をはぐくむことが大切であると考え、本分科会主題を設定した。

II 研究のねらい

- 1 児童・生徒の他者とかかわりについての意識・実態を明らかにする。
- 2 互いに気持ちや考えを伝え合い、認め合う人間関係をはぐくむことができる指導内容・指導方法を明らかにする。

III 研究の方法

- 1 児童・生徒の他者とかかわりについての意識・実態調査を行い、分析・考察する。
- 2 児童・生徒が互いに気持ちや考えを伝え合い、認め合う人間関係をはぐくむことのできる対人関係のスキルを身に付けるようにするための指導内容・指導方法を工夫する。

Ⅳ 研究の内容

1 調査研究

- (1) 目的：児童・生徒の他者とのかかわりについて、意識・実態を明らかにする。
- (2) 方法：クラスごと質問紙による。
- (3) 対象：研究員所属校の児童・生徒

校種	小学校 (人)				中学校 (人)			高等学校 (人)			合 計 (人)
学年	3 年	4 年	5 年	6 年	1 年	2 年	3 年	1 年	2 年	3 年	
男子	75	94	102	97	151	151	144	114	113	90	1,131
女子	64	75	86	105	134	132	125	191	159	153	1,224
合計	139	169	188	202	285	283	269	305	272	243	2,355

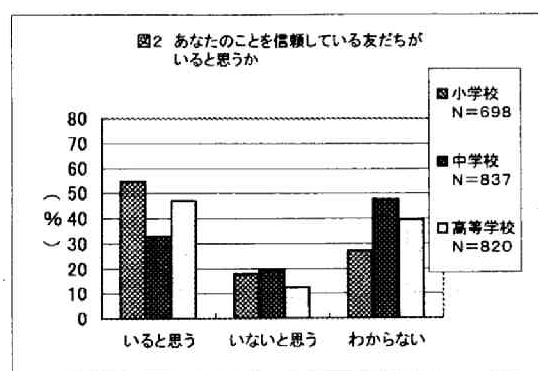
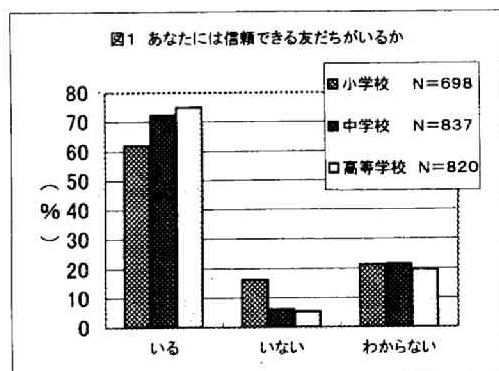
(4) 実施時期 平成12年 7 月

(5) 調査仮説

- ① 集団の中で、自分の存在感を認識できる子どもは、他者を理解し、他者を尊重することができる。
- ② 他者との信頼感と誰かの役に立っているという有用感がある子どもは、他者を理解し、他者を尊重することができる。

(6) 結果及び考察

- ① 「友達といて楽しいか」の質問に、「楽しい」と「どちらかといえば楽しい」と答えた子どもは、全体の92.2%であった。各校種での差異はほとんどみられなかった。ほとんどの子どもが、友達の中で自分の存在を認識していると考えられる。
- ② 「あなたは信頼できる友達がいるか」の質問では校種が上がるにつれ、「いる」と答えた割合が増えている。(図1) 一方「あなたのことを信頼している友達がいると思うか」の質問では、「いると思う」と答えた割合が、すべての校種において図1の「信頼できる友達がいる」と答えている割合より低くなっている。(図2) 信頼できる友だちはいるが、自分のことを信頼してくれる友達がいることについては自信がない傾向がみられる。特に、中学校ではこの差が顕著であり、約7割の生徒が信頼できる友だちがいると答えているが、友だちから信頼されていると思っている生徒は約3割であった。中学生期特有の精神的な不安定さの表われであると考えられる。図1、図2より互いの意思の疎通が十分図られていないことが考えられるため、今後互いに認め合えるよう対人関係のスキルを高める指導が課題となってくる。



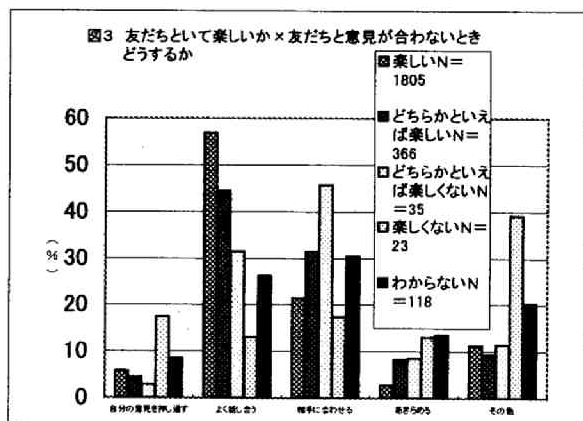
③ 「あなたは誰かの役に立っていると思うか」の質問に、「思う」と答えた者は、全体の25.7%であった。本研究では「誰かの役に立っている」と答えた者を、有用感をもっているととらえた。従って、有用感をもっている者は約4人に1人であることが分かった。校種別では、小学校27.1%、中学校20.2%、高等学校30.2%と中学校が最も低かった。

④ 「あなたは、友達と意見が合わないとき、どうするか」の問いでは、「よく話し合う」が全体の約半数で、次いで「相手に合わせる」が24%、「自分の意見を押し通す」が5.8%、「あきらめて合わせない」が4.3%であった。人間関係をより豊かなものにするには、「よく話し合う」ことがさらに増えるような指導が課題となってくる。

⑤ 中学生、高校生には「交際している異性から、自分の気持ちや考えに合わないことを求められたら、あなたははどうすると思うか」について質問した。中・高校とも約3分の2が「よく話し合う」と答えており、「相手に合わせる」は中学校14.0%、高等学校8.1%であった。よく話し合い、相手を理解し、尊重できるような態度や能力を育てる指導の工夫が大切になってくる。

(7) 調査仮説の検証

① 調査仮説①について 「友だちといて楽しいか」と「あなたは、友達と意見が合わないとき、どうするか」についてクロス集計を行った。(図3)「友達といて楽しい」の56.8%が「よく話し合う」と答えているのに対し、「友達といて楽しくない」と答えている子どもは13.0%であった。

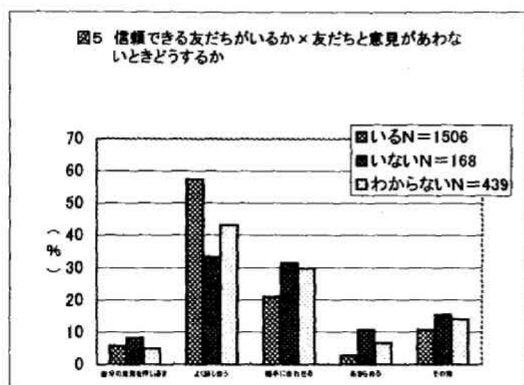
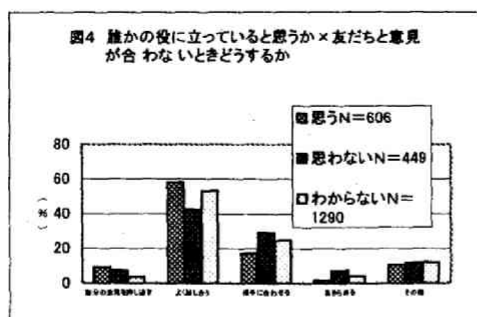


本研究では、「友達といて楽しい」ということは、集団の中で存在感を感じていることと考え、また、「友達と意見が合わないとき、話し合って解決する」ということは、他者を理解し、他者を尊重することができることと考えた。

クロス集計の結果から、集団の中で、自分の存在感を認識できる子どもの方が他者を理解し、他者を尊重している傾向がうかがえた。しかし、「友達といて楽しい」と答えた者の中でも、約4割は話し合い以外の方法を選択しており、今後「よく話し合う」ことで相互理解を深め、豊かな人間関係をはぐくんでいけるような指導の工夫が大切になってくる。

② 調査仮説②について

「あなたは誰かの役に立っていると思うか」と「あなたは、友達と意見が合わないとき、どうするか」についてクロス集計を行った。(図4)「役に立っていると思う」と答えた者の方が、「役に立っていると思わない」と答えた者より、話し合って解決をしていく割合が高かった。しかし、有用感をもっていても約4割は話し合い以



外の方法を選択していた。

「あなたは信頼できる友達がいるか」と、「あなたは、友達と意見が合わないとき、どうするか」についてクロス集計を行った。(図5)「あなたは信頼できる友達がいるか」の質問で、他者への信頼感の有無を見た。「信頼できる友達がいる」と答えた者の方が、「信頼できる友達がいらない」と答えた者より、話し合って解決する割合が高かった。このことより、信頼感をもっている者は他者を理解し、他者を尊重している傾向が強いことがうかがえた。また、「信頼できる友達がいらない」と答えた者の約3割は話し合って解決している一方、約3割は相手に合わせると答えていることが分かった。

(8) 調査研究のまとめ

- ① 「友達として楽しいですか」の質問に、全体の9割強の者が「楽しい」または「どちらかといえば楽しい」と答えていた。ほとんどの子どもが、友達の中での自分の存在を認識していると考えられる。
- ② 有用感をもっている者は約4人に1人であった。校種別では、中学校が約5人に1人という結果であった。
- ③ 信頼感を問う質問では、信頼できる友達はいるが、自分が信頼されていることへの自信は十分でない様子がうかがえた。
- ④ 自分の存在を認識している子どもも有用感、信頼感をもっている子どもでも、約4割は友達と意見が合わないとき、話し合い以外の方法を選択していた。話し合って互いの関係を調整しながら人とつきあうことの大切さを身に付けさせたいと考える。
- ⑤ 交際している異性から、自分の気持ちや考えに合わないことを求められた場合、中・高校とも約3分の2が「よく話し合う」と答えていた。心身の発育・発達に伴い、特定された異性とよりよい人間関係を築いていきたい気持ちが表われていると考えられる。異性関係では、互いを理解、尊重しあうとともに、性的自己決定を行い、責任ある行動がとれる能力を育てることが大切である。そのために、体験的学習を取り入れるなど、対人関係のスキルを高める指導が有用だと考える。

(9) 研究仮説の設定

以上の調査研究の結果を踏まえ、研究仮説を以下のように設定した。

互いに気持ちや考えを伝え合い、認め合うことができる対人関係のスキルを身に付けさせることにより、豊かな人間関係をはぐくむことができる。

2 授業研究

(1) 指導計画作成の視点

学校における性教育は、特定の教科等にその内容が示されているものではなく、学校の教育課程に位置付け、指導計画により教育活動全体を通して計画的に指導することが大切である。

保健学習と保健指導は教育課程上の位置付けやそのねらいが異なる。保健学習は体育・保健体育や家庭科、理科等関連教科の学習指導要領に示されている健康にかかわる内容について共通に学習する。一方、保健指導は各学校の子どもたちの実態や当面している健康課題について、具体的な対処能力を高めることをねらいとして、特別活動の時間等に行われるもので実態に応じて指導する内容や方法を工夫して指導する。

今回の指導計画の作成に当たっては、昨年の学校保健部会が、主として性教育における自己肯定感や自尊感情に視点を当てて研究を進めたことを踏まえ、その成果を引き継ぎつつ、小学校、中学校、高等学校に共通の課題として、他者との関係の在り方あるいは対人関係の能力を高めることに視点をおいた保健指導の指導計画を作成した。

特に、平成14年度から全面実施される新学習指導要領（高等学校は平成15年度より学年進行）の特別活動の目標に示されている「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図るとともに、集団の一員として…自主的、実践的な態度を育てる。（小学校）」という部分の趣旨を生かした指導計画を作成した。

(2) ライフスキル学習との関連

児童・生徒の自主的・自発的な学習を促し、意欲や関心を高めるための学習の工夫として、保健学習と保健指導においては、ライフスキルを高める学習活動の重視が求められている。とくに対人関係のスキルや効果的なコミュニケーション能力を育てる学習方法として、教師主導の一斉指導ではなく、事例研究法をモデルとして身近に起りうるような問題を事例として子どもたちに提示し、事例を自分の問題として考え、課題を見つけたり、解決方法を考えることや個人で考えたことをもとにグループごとにディスカッションを行ったり、校種によってはロールプレイングの手法を用いたりするなど、多様な学習方法を用いて、対人関係のスキルを高めることができるような構成にした。

3 指導の工夫

(1) 指導内容の工夫

- ① 男女の豊かな人間関係を築くために必要な対人関係のスキルを身に付けさせることをねらいとして、異性とのかかわりの中で生じてくる問題を取り上げ、自分の問題として考えさせる内容を設定した。
- ② 小学校、中学校、高等学校のそれぞれの校種で発達段階及び実態をふまえながら、共通のねらいで指導し、各発達段階での成果と課題が明らかになるようにした。
- ③ 小学校、中学校、高等学校とも男女のかかわり方について、異性理解と男女の人間関係という共通の主題を設定し、各校種ごとの授業計画を工夫した。
- ④ 事前に意識・実態調査を行い、小学校、中学校、高等学校に共通した人間関係にお

ける課題をとらえ、各校種ごとの授業計画を工夫した。

(2) 指導方法・指導形態の工夫

- ① 互いに自分の考えを発表する機会を設け、自分と他者の意見を比較しながら考える場面を設定した。
- ② 関心や意欲を高めるため、身近に起りうる問題を事例文にして例示した。事例文の例示方法は校種の発達段階や実態に合うように工夫した。
- ③ 異性の気持ちや考えを知ることができるよう、男女混合のグループにして話し合させた。
- ④ 養護教諭と学級担任とによるチームティーチングで授業を展開し、児童・生徒一人一人の意見を大切にしながら適切な助言ができるよう工夫した。
- ⑤ 表やカードを掲示して学習内容をわかりやすく提示し、児童・生徒が意見をまとめやすいように黒板の使い方を工夫した。
- ⑥ 事後アンケートや授業後の感想をワークシート等に記述させ、児童・生徒の意識の変化をみた。
- ⑦ コミュニケーションスキルを高めるために有効な学習活動の1つであるロールプレイングやシナリオライティングを取り入れ、児童・生徒が体験的な学習を通して、性的自己決定能力を高められるように工夫した。
- ⑧ 机をグループごとにまとめて配置し、一人一人の意見や考えが出やすいように工夫した。

(3) 教材や学習資料の工夫

- ① 学習プリントを作成し、考えたり話し合ったりしやすいように発問を工夫し、活用した。
- ② 事例文の内容や提示方法を校種の発達段階に合うように工夫した。小学校は事例文を教師が読みあげた。中学校の事例は手紙文を作成し、生徒が読んだものを録音し、手紙文の内容を音声で聞かせる工夫をした。
- ③ 高校では生徒が興味・関心をもって課題に取り組めるように、提示する事例を漫画で示したワークシートを作成した。
- ④ 異性とのかかわり方について、児童・生徒の気持ちを分類するカードを作成し、学習内容を理解しやすくするために活用した。
- ⑤ 授業内容のねらいを表示したカードを作成し、授業の最後にまとめとして活用した。
- ⑥ 高校生の性行動の現状についての最新データを取り込んだワークシートを提示し、異性とのかかわりの中で現在、あるいは近い将来に自分にも起こりうる問題として考えられるように工夫した。

4 実証授業Ⅰ（小学校、学級活動：保健指導）

(1) 主題 異性とのかかわり

(2) 対象 第6学年

(3) 主題設定の理由

思春期を迎えると、異性に対して関心が芽生える。しかし、異性に対して自分の気持ちをきちんと相手に伝えることができなかつたり、相手の気持ちを考えずに行動してしまつたりする児童も見られる。この時期に他者を理解し、他者を尊重する行動ができる対人関係のスキルを身に付けさせることが、異性との信頼関係を築き、豊かな人間関係をはぐくむ上で大切であると考え、本主題を設定した。

(4) 本時のねらい

① 異性との人間関係を豊かなものにするためには、自分の気持ちや考えを話し合いを通じて伝え、認め合うことが大切であることを理解させる。

② 相手の立場や気持ちを考えながら行動することが大切であることを理解させる。

(5) 本時における工夫

① 児童が自分自身の問題として考えられるように、オリジナルのシナリオを学習教材として取り上げた。

② 一人一人意見を出しやすいように、班ごとの話し合いの時間をもうけた。

(6) 本時の展開

	学 習 内 容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導 入 5分	本時のねらいを理解する。	「友達のことを信頼できないよ」と思うのは、友だちがどのような態度をとったときかを考える。 異性間で「信頼できないよ」と思ったことがあったかを考える。	具体的なことをあげて発表させる。 批判せずに受け止め、話しやすい雰囲気をつくる。
展 開 35分	互いの気持ちを理解する。	男女間でのトラブルを例にしたシナリオを聞く。 自分の気持ちをきちんと伝えるにはどのような言い方がいいかをワークシート1に記入し、発表する。 相手の気持ちを知り、自分はどのような行動をとったらいいか、その理由も合わせてワークシートの①②に記入する。 ワークシート2の①②について、班で意見を交換する。 ワークシート2の①②について、どのような意見が出たのか、班ごとに発表する。	シナリオの内容に、児童がどのような反応をするのかを見ながら読む。 もし自分が同じ場面に出会ったら、ということ考えさせる。 班の中でいろいろな考えを出せるようにする。 他の班の考えを聞き、考えを深めさせる。
ま と め 5分	異性とかかわるときに大切なことを理解し、まとめる。	信頼関係を築いていくためには、話し方や態度に気をつけることを理解する。 ワークシートを提出する。	「自分の考えを伝えること」「相手を大切にできる行動をするこ」を考えさせながら、まとめる。

(7) 評価

① 異性とつきあっていくためには自分の気持ちや考えを、話し合いを通じて伝え、認め合うことが大切であることが理解できたか。

② 相手の立場や気持ちを考えながら行動することが大切であることが理解できたか。

(8) 授業後の分析と考察

① 指導のねらいと結果について

小学生という発達段階を踏まえて、授業の導入は友達との関係から入った。児童の異性に対する関心は高く、事例に取り込んだ異性を好きになるという気持ち、さらにはその気持ちを相手に伝える行動、その後に生じた男女間の問題、トラブルについては自分自身の問題として考えることができた。

また、1時間の授業では、話し合いの時間を十分にとることができず、児童一人一人が他の児童の意見を聞いて考えを深めたり、新たな意見交換をしたりできないなど改善すべき点も明らかになった。

授業で使用したワークシートの中に設定した「人との接し方であなたが考えたことは何ですか」という質問には、大部分の児童が「相手の気持ちを考えて行動することが大切だ」と答えていた。他にも「自分の言いたいことははっきりと相手に伝わるように話す」「相手が傷つかないような話し方を考える」と答えていた。

また、普段から相手のことを考えて行動している児童は、自分の異性に対する接し方が「間違っていない」と再確認させることができた。

この授業の実施前には見られた異性に対して好意を抱いている友達へのひやかしが授業後はなくなった。今まで以上に男女仲良く、協力する様子がうかがえた。これらのことから本時のねらいは達成できたと考える。

② 指導内容について

思春期を迎える時期は、異性との関係も豊かなものにする必要があるため、男女のかかわりから生じた問題を取り上げ、児童が自分自身のこととして考えられるよう工夫した。

③ 指導形態について

異性との関係を取り上げた授業のため、男女一緒の班でディスカッションを行った。この班構成は、異性の気持ちを理解する上で重要であると考えた。

班別にディスカッションさせた後、全体発表をした。この展開で話し合わせたことにより、児童一人一人が自分の意見を発表できる場面を設けることができた。

また、養護教諭が授業を行うときは、担任とチームティーチングを組むことにより、児童の様々な反応にも適切な対応ができた。

④ 指導教材について

児童が自分自身のこととして考えられるように、オリジナルのシナリオを作った。このことにより、児童が授業の内容を素直に受け入れることができた。授業のねらいを達成するためにも、児童が自分自身の問題として考えられることは非常に重要なことであり、オリジナルのシナリオを工夫したことは有効であった。

しかしワークシートの設問によっては、その意味を十分に理解できなかった児童もあり、設問の内容・発問の仕方をさらに工夫する必要がある。

5 実証授業Ⅱ（中学校、学級活動：保健指導）

(1) 主題 異性理解と男女の人間関係

(2) 対象 第2学年

(3) 主題設定の理由

調査研究から、思春期にある中学生の精神的な不安定さ、周囲の人間とのかかわりの中で自分の思いをうまく表現できないなどが問題として明らかになった。不安感や自信のなさを取り除き、男女の人間関係を豊かなものにするためには対人関係のスキルを身につけることが必要であると考え本主題を設定した。

(4) 本時のねらい

① 異性の心理を理解させる。

② 男女の豊かな人間関係を築くために必要な対人関係のスキルについて考えさせる。

(5) 本時における工夫

① 異性の気持ちや考えを知るために、男女混合班で話し合わせた。

② 身近な問題として考えられるように、具体的な事例を手紙文の形をとって例示した。

③ 一人一人の意見や考えが自由・活発にだせるよう雰囲気づくりを工夫した。

(6) 本時の展開

T1：学級担任

T2：養護教諭

段階	学習内容	学習活動	分担	指導上の留意点
導入 5分	本時のねらいを理解する。	授業者の話を聞き、本時のねらいを理解する。	T2	中学生期は、体や心が著しく発達するとともに、異性への関心も出てくる。しかし異性の心を十分にとらえる力が未熟であるためトラブルも多い。かかわり方について考えさせる。 話しやすい雰囲気を作る。
展開 40分	異性の心理を理解する。 「たくや」に誘われた時、どのような返事をするか、考える。 「たくや」と「あみ」は今後どのように付き合っていけばよいか、考える。	プリントを配布する。 女子生徒が「手紙」を読むテープを聴く。 「あみ」はどんな気持ちでこの手紙を書いたのか、考え、発表する。 「あみ」にどのようなアドバイスをするか、各自記入し、発表する。 プリント②について各自記入する。 机を向き合わせ、班を作り、②について話し合う。 ②について発表する。 ワークシートに各自記入し、班で話し合う。 班での話し合いについて発表する。	T1 T2 T1T2 T1T2 T2 T1 T2	「たくや」が「あみ」に好意をもっているようだということを明示する。 数人に発言させる。 いろいろな方向から考えが引き出せるように配慮する。 数人に発言させる。 机間を廻り、助言を行う。 T1が「たくや」役を演じる。 対人関係の対応として「受容」「拒否」「折り合い」の3つに整理し、提示する。 意見について板書する。 もし意見が分かれたら無理にまとめず、どちらも意見として尊重する。
まとめ 5分	異性に対するマナーを理解する。	発表をもとに、相手が嫌な思いをしたり誤解を招いたりしないように、異性に対するマナーを理解する。 感想文を書く。 プリントを提出する。	T2 T1	板書をいかし、一般的なマナーについて考えさせる。

(7) 評価

① 異性の心理を理解し、異性に対するマナーが考えられるようになったか。

② 豊かな人間関係を築くためには、お互いを認め合い尊重しあう気持ちや態度を身につけることが大切であることがわかったか。

(8) 授業後の分析と考察 (N=135 3校4クラス)

① 指導のねらいと結果について

授業後に行ったアンケートでは、今回の授業でそれぞれ「相手に分かるように伝える」が64%、「相手の考えや気持ちをよく聞く」が56%、「お互いを大切な存在として認め合う」が60%、「マナーを守り、節度ある行動をとる」が57%で、生徒が考えるようになったと答えている。それに対して、「考えられなかった」と回答した割合は平均して13%で、男女別にみると男子に多かった。手紙文が女子生徒からであったため、自分自身の問題として考えにくかったと思われる。ワークシートの自由記述による生徒の感想からは、「難しいことだけど、マナーを守り豊かな人間関係にしていきたい」、「対処の方法が分かった」、「こういう話し合いをすることがなかったので、勉強になった」、「いろいろな意見があるのだと思った」などの意見が多かった。

このような生徒の感想から、本時のねらいは、達成できたと言える。

② 指導内容と方法について

ワークシートを使用して授業を展開し、班別ディスカッションや簡易なロールプレイングを実施した。ディスカッションや発言も活発に行われ、活気のある授業になった。ロールプレイングについては、生徒が恥ずかしがってしまうことを予想して、学級担任が男子生徒役をすることで円滑に展開できた。

事例は、親しい友人と考えていた異性から、家族が不在の時に二人だけで試験勉強しないかと誘われて当惑している友達からの相談の手紙という形で提示した。事例検討の方法で授業を展開する場合は、事例そのものの適否が授業の成否に大きく作用することは明らかである。今回の事例は、女子には自分自身の問題としてとらえやすかったと考えられる。

③ 指導形態について

学級担任と養護教諭によるチームティーチングで行った。一人一人の生徒の意見や考えが生かされるよう、生徒の席を巡りながら助言を行った。またそれぞれの特性を生かしながら、変化に富んだ授業が展開でき、生徒にも肯定的に受け入れられた。

班別ディスカッションでは、異性の気持ちや考えを知るために、男女混合班で話し合わせた。意見交換も活発に行われ、多様な意見が出た。授業後のアンケートで「班で話し合った時、自分が感じたり考えたりした意見を班員に伝えられましたか」という問いに対して、女子は「伝えられた」「少し伝えられた」と答えた割合は62%であった。それに対して、「あまり伝えられなかった」「伝えられなかった」と答えた割合は男子に多く50%であった。女子のほうが積極的に取り組んでいたと言える。

④ 指導教材について

身近な問題として考えられるように、実際に存在しそうな手紙を創作し、女子中学生に読んでもらったテープを提示したことにより、現実的に考えることができた。話題も完結しない形だったので、生徒の発想を広げることができた。

また、会話からのかかわり方を分類するカードやマナーについてのまとめたカードは、分かりやすく、有効であった。

6 実証授業Ⅲ（高等学校、ホームルーム活動：保健指導）

(1) 主題 異性理解と男女の人間関係

(2) 対象学年 第2学年

(3) 主題設定の理由

高校期は身体的発育、発達完成期に近づく一方で、精神的には不安定なところもあり、安易な行動をとる生徒もみられるようになっている。話し合い、調整を図りながら物事を解決していこうという態度を育てる指導、対人関係のスキルを高める指導が必要であると考え、本主題を設定した。

(4) ねらい

① 他者を理解し尊重するためには話し合い、認め合うことの重要性を理解させる。

② 性行動では自分で判断・意志決定することが大切であることを理解させる。

(5) 指導の工夫

① 異性の気持ちや考えを知るために男女混合班で話し合わせる。

② 異性とのかかわりの中で起こりうる問題を状況がわかりやすく、興味・関心を高めるため漫画を使用して、主題を提示した。

③ 生徒の意欲や関心を高めるために、シナリオ作成やロールプレイングによる体験的な学習活動を取り入れた。

(6) 具体的な展開例（2時間構成）

1時間目

T1：学級担任 T2：養護教諭

段階	学習内容	学 習 活 動	分担	指 導 上 の 留 意 点
導入 5分	学習のねらいを理解する。	男女の対人関係スキルの学習をすることを理解する。 高校生の性行動についての現状を知る。	T1 T2	TTで授業を行なうこと、男女の対人関係スキルを2時間かけて学習することを理解させる。 現在から将来にわたって、自分に起こり得る問題として考えさせる。
展開 40分	性交とその問題点について考える。 異性の心理を理解し、他者に自分の意見をまとめ発表する。	「性交」とは何かを考え、男女の異性への接近欲の違いに気付き、性交にかかわる問題点を考える。 ワークシートの漫画「ある日のできごと」を読み、男女の対人関係で大事なことは何か考える。 ワークシートに自分の考えを記入し、グループで意見を出し合う。 グループ発表し、代表者が黒板に記入する。	T2 T1 T2	安易な性行動による、望まない妊娠や性感染症の問題があることを理解させる。 「異性への接近欲・接触欲」 「年齢階級別にみた人工妊娠中絶実施率」 「東京都の性感染症患者報告数」 ワークシートに自分の考えをまとめた後、グループで話し合い、個々の意見の違いを理解させる。（問1・2記入後、男女混合グループにさせる） 互いの考え方を尊重するとともに、自分の意志を明らかにして相手に伝えることの大切さを理解させる。

		シナリオを作成する。	T1 T2	漫画のストーリーの続きをシナリオにして考えてみることの説明。3つの展開（受入型・拒否型・調整型）を提示し作成することを理解させる。
まとめ 5分	男女の人間関係において大切なことについて考える。	本時で学習したことを確認し、問3を記入する。 次週に行う学習内容を確認する。	T2 T1	男女ともに話し合い、認め合うことがよりよい関係を築くための基本となることを押さえる。 ロールプレイングを行うことを説明する。

2 時間目

段階	学習内容	学 習 活 動	分担	指 導 上 の 留 意 点
導入 10分	本時のねらいを理解する。	本時の学習のねらいを理解する。 ロールプレイングのねらいやルールを理解する。 男女混合のグループを作っておく。（1時間目と同様6班に分け、その中で役割を決める）	T1 T2	1時間目の授業と関連付け、本時の説明をする。 ロールプレイングは疑似体験や観察を行なうことにより、お互いの心の動きが発見できる学習であることを説明する。スイッチオン、オフを理解させる。
展開 35分	男女の望ましい人間関係、性行動と意志決定のかかわりについて考える。	ロールプレイングを行う。 1時間目に作成したシナリオにより、男子の役・女子の役各1名で演じる。 グループの代表が発表する。	T1 T2 T1 T2	机間を巡り、ロールプレイングが正しく行われるよう助言する。 各グループの展開を発表させる。（それぞれの役割を行っての感想を発表させる）
まとめ 5分	よりよい人間関係を築くために必要なことについて考える。	ロールプレイングのふり返りをし自己評価を行う。 ワークシートに実習後の感想を記入する。	T1 T2	性行動では相手の考えを受け止めるとともに、自分の意志を正しく相手に伝えることが大切であることを理解させる。

(7) 評価

- ① よりよい人間関係を築くには、男女が互いに尊重しあい、話し合い、認め合うことが大切であるということが理解できたか。
- ② 性行動では自分で判断し、意志決定をしていくことの大切さが理解できたか。

(8) 授業後の分析と考察

- ① 事例を漫画で示したことで、生徒の反応はよかった。漫画の内容は、ある男子の家で男女数人で遊んだ後、女子一人を残して全員が先に帰った。2人だけになり音楽を聴いていると男子がキスを求め、体に触れてきたので女子は驚き、その場から逃げるように立ち去ったというものである。男女混合の班に分かれ、その後の展開をシナリオライティングにより予想させた。シナリオを作成する過程で男女が相互に意見を出

し合っており、班構成については男女別か、男女混合か意見が分かれたが、結果的には男女混合の班構成はねらいどおりに機能したと考える。しかし、グループの人数を1グループ6～7人としたため、円滑にシナリオ作成が進まなかったグループもあり、1班の人数についてはさらに検討する必要がある。

- ② 2時間目には1時間目に作成したシナリオを使いロールプレイングを行った。授業の始めにロールプレイングについての説明をしたが、多くの生徒は理解しないまま実習に取り組んでしまったことが、授業後の感想から推測できる。その反面、「実際はこんなことは言わない」「もう少し自分の考えで演技したかった」など自己の意見をもっている生徒もいたので、授業展開や資料提示の機会等を工夫することにより、自分ならどうするかという部分をもう少し深めることもできた。

- ③ 養護教諭として担任とのティームティーチングで授業を展開した。授業時間中の役割分担については概ね想定どおり展開できたが、事前の資料やワークシートの準備、あるいは指導案の検討等は十分に時間をかける必要があることを確認した。

特に、授業の導入におけるガイダンスの部分とオープンエンドで終息するまとめの部分で、生徒に何を伝え、考えさせるかという点については、十分に吟味する必要があることがわかった。

- ④ 生徒の感想より

ア ロールプレイングについては、「実際にはありえない」、「自分の考えだけではなく相手の気持ちも分かった」、「自分の考えとは異なる役をやったのでもどかしかった」、「アドリブだけでやったらもっと面白くなると思った」、「恥ずかしかった」などの感想があった。生徒一人一人が体験できるように、必ず一度は役を演じてみる工夫をしたが、シナリオを読むだけで終わってしまったり、演じさらに演じたことから感じとるという作業まで十分に理解できなかったりした部分があったため、ロールプレイングの授業への取り入れ方をさらに工夫する必要があることがわかった。しかし、少数ではあるが、自分とは違う役を演じたことにより、自分の中に湧いてくる気持ちを体験できた者もいた。

イ 2時間を通しての感想では、「男女で授業の中で性に関することを問題にして真面目に取り組めたのでよかった」、「普段あまり聞けない女子の考えを聞くことができた」など、お互いの意見をだし合うことができた班もあった。しかし、一方で「ねらいや内容がよくわからなかった」という感想を述べた生徒も79人中8人（2校2クラス）いた。授業にあたってねらいを明確にすることや内容・方法を生徒に十分理解させた上で、学習に取り組ませることが大切であることがわかった。

ウ 男女がよりよい関係を築いていくうえで大切なことは何か、という質問については、「お互いに信頼し、思い合って、支え合うこと」、「お互いの気持ちを確かめ合いながらつきあう」、「男女の相互理解」、「コミュニケーション」、「思ったことを言いあう」など、授業のねらいを理解できたことは明らかである。

V 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 児童・生徒の意識調査の結果、信頼感や有用感がある児童・生徒は他者を理解し、他者を尊重できる傾向が強いことが明らかになった。信頼感や有用感を高めるためには、互いに気持ちや考えを伝え合い、認め合うことができるような対人関係のスキルを身に付けさせることが必要であるということが分かった。
- (2) ワークシートを使用して事例検討の手法を用いて、授業を展開したことにより、身近な問題として考えさせることができた。
- (3) 班別ディスカッションを取り入れることにより、児童・生徒が自分の意見を出しやすくなった。そのことにより全体発表に様々な意見が出され、児童・生徒一人一人の考えが深まっていった。
- (4) 全員で意見交換をすることにより、自分の考えを相手に伝えたり、相手の多様な考えを知ることができ、他者を尊重し、他者を理解する能力を高めることができた。
- (5) ロールプレイングを取り入れることにより、自分の意思とは異なる役割を演じることができ、その立場にたった時の心情を味わうことにより、対人関係のスキルを高めることにつながった。
- (6) 小学校では、「相手の気持ちを考えて行動することが大切」、「相手の立場に立って行動する」などの感想が多数あった。中学校では、「難しいことだけど、マナーを守り、豊かな人間関係にしていきたい」、「対処の方法がわかった」、「こういう話し合いをすることがなかったので勉強になった」などの感想がワークシートの自由記述欄に記入されていた。高校では、男女がよりよい関係を築いていく上で大切なことは何かという質問に「お互いの気持ちを確かめ合いながらつきあう」、「思ったことを言い合う」、「コミュニケーション」と答えた生徒が多かった。これらのことから小学校、中学校、高等学校とも、学習のねらいは達成できたと考える。
- (7) 養護教諭と担任がTTにより授業を行うことにより、個々に応じたきめ細かな指導をすることができた。性の問題は極めて個人的な課題の部分も多く、学級として授業を行う場合でも、個人差や一人一人の実態に配慮した指導が大切であることが分かった。
- (8) 対人関係のスキルを高めるためには、児童・生徒の発達段階をふまえて、適切な時期に実施することが大切であるということが分かった。

2 今後の課題

- (1) 総合的な学習の時間を視野に入れ、教育活動全体を通した指導計画の策定を進める必要がある。
- (2) ロールプレイング、班別討議、ディベート等ライフスキル学習の方法を取り入れた授業を開発し、子どもたちの実践力を育てる指導方法を推進する。
- (3) 養護教諭の専門性をいかし、児童・生徒の各発達段階の心身の発達の特徴をとらえ、当面する課題を解決するための指導内容を工夫する。

第 2 章

< 第 2 分科会主題 >

互いに認め合い大切にしようとする意識を育てる保健室相談活動の工夫

I 主題設定の理由

多くの児童・生徒たちには、人間関係のもち方が未熟で対処法がわからないためにトラブルが生じていたり、自己肯定感がもてず、自分を大切にしようとする意識が低かったり、自己決定能力が乏しく指示されるまで行動できなかったりなどの実態がある。

一方、これまでの保健室相談活動の在り方においては、学校によっては問題を抱えていても来室しない子どもがいるという課題があった。また、来室しても次のような課題があった。

1 点目としては、保健室には、種々の目的で来室があり、相談に十分な時間的余裕がないこと。2 点目は、養護教諭が何かしてくれる場所という保健室の役割イメージにより、児童・生徒にとって受動的な相談になること。3 点目は、何か問題が起きてからという対応型の相談になりがちであることである。

特に、性に関する来室相談は、学年が上がるにつれて多くなる実態があるので、それより前の段階から、予防的にかかわることが求められる。

これらの現状をふまえ、第2分科会では、児童・生徒が男女共に互いの特性を理解し、認め合い、協力し、よりよい人間関係を築きあげようとする意識を育てることが重要であると考えた。そのためには、児童・生徒が正しい性知識を身につけ、自己選択・自己決定できる力をもつことが必要である。

そこで、子ども一人一人の心身の発達段階に応じて個別に指導することができる保健室の機能や養護教諭の専門性を生かした相談活動の在り方を研究し、児童・生徒の性にかかわる課題解決を支援できる保健室相談活動を進めるために本主題を設定した。

II 研究のねらい

- 1 児童・生徒が、個々に抱えている性に関する悩みや問題点を明らかにする。
- 2 保健室の機能や養護教諭の専門性を生かした相談活動を工夫する。
- 3 児童・生徒が、自他を大切にした行動選択・問題解決ができる力を育てる指導を工夫する。

III 研究の方法

- 1 児童・生徒を対象として、性に関する実態調査を行い、分析・考察する。
- 2 児童・生徒に相談活動に対しての興味・関心をもたせるための教材を作成する。
- 3 予防的かつ実地的な保健室相談活動を工夫する。
- 4 個別指導を通して、児童・生徒が自他を大切にした行動選択・問題解決ができる力を育てる手立てを工夫する。

IV 研究の内容

1 調査研究

- (1) 目的：児童・生徒が抱えている悩みや問題点を明らかにする。

児童・生徒が不安や悩みをどのように解決しているのか、また、異性とのかわりを含めた人間関係について明らかにする。

- (2) 方法：クラスごと質問紙法による。

- (3) 対象：研究員所属校 小学校 4 校 中学校 3 校 高校 2 校及び調査協力校 高校 2 校で実施した。

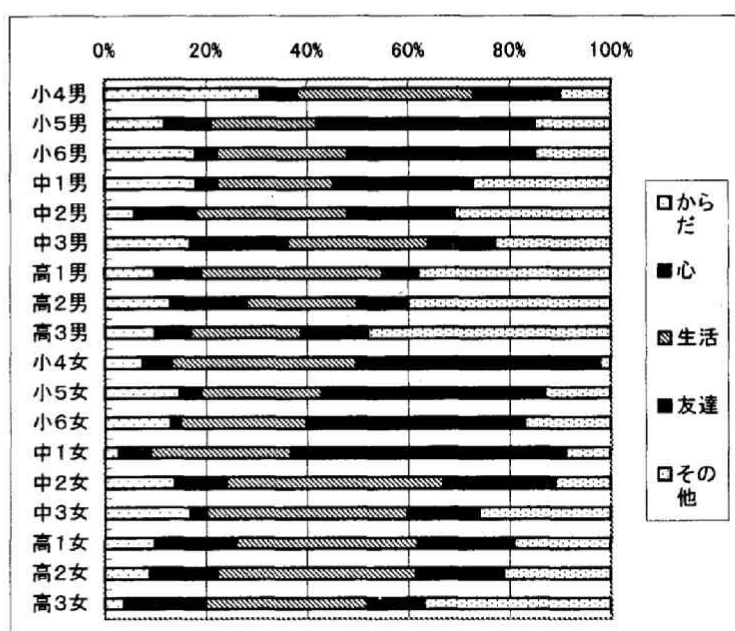
校 種	小学校 (人)			中学校 (人)			高等学校 (人)			合 計 (人)
学 年	4 年	5 年	6 年	1 年	2 年	3 年	1 年	2 年	3 年	
男 子	99	96	123	69	81	78	172	112	100	930
女 子	104	107	126	66	53	64	208	151	133	1,012
合 計	203	203	249	135	134	142	380	263	233	1,942

- (4) 実施時期 平成12年 7 月

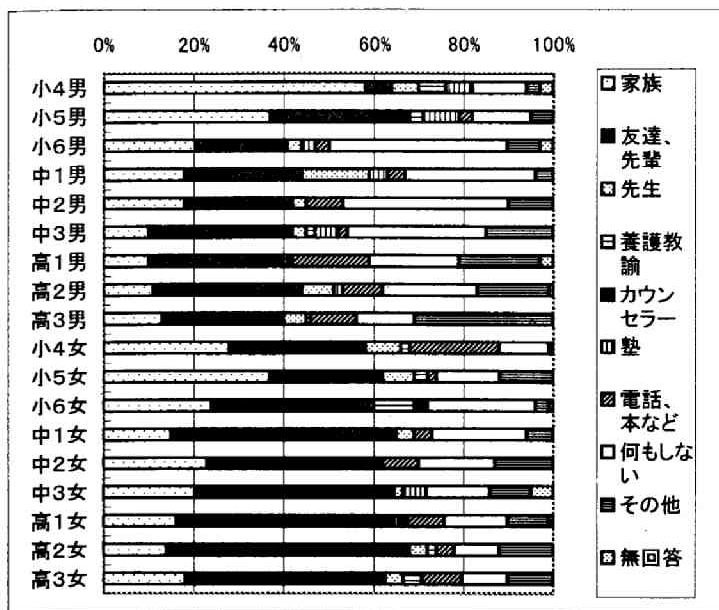
- (5) 調査仮説

- ① 学年や性別によって悩みの内容が異なってくる。
- ② 学年や性別によって悩みを相談する人や解決方法が多様になってくる。
- ③ 小学校では、クラスの男女の仲はあまり良くない。
中学・高校では、成長に伴って同性と異性との接し方が違ってくる。
- ④ 男子に比べて女子の方が相談できる友達をもっている。
- ⑤ 友達から相談されても相談にのる割合は低い。

- (6) 結果及び考察

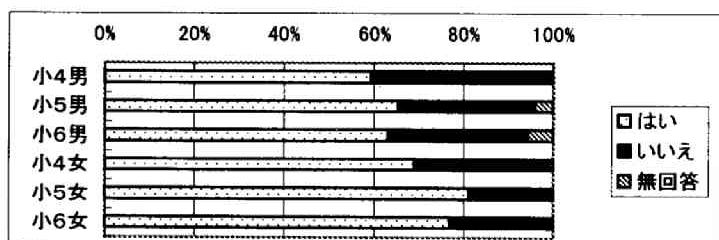


- ① 「悩んでいる内容」の質問にどの学年も共通して、「友達」「生活」の割合が高い。特に小学校から中学1年生にかけては「友達」のことで悩んでいる。その割合は女子が高い。対人関係を円滑に進めていくことを援助していく必要がある。学年が上がるにつれて「その他」が増え、悩みが多様化している。

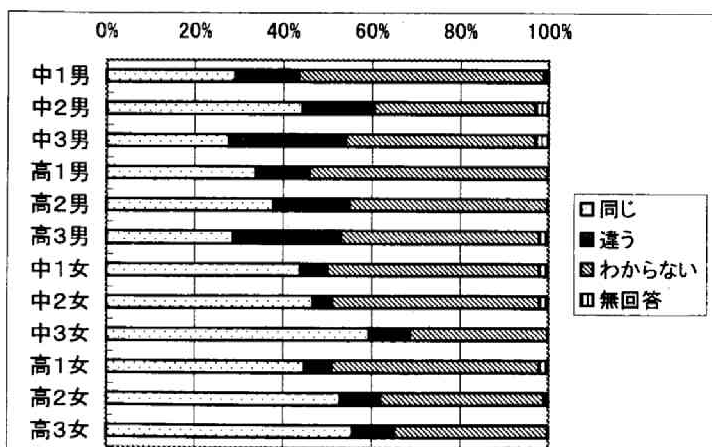


② 「悩みを相談する人、方法」についての質問では、女子は誰かに相談する割合が高い。男子は家族をはじめ誰かに相談する割合が、学年が上がるにつれて減る。特に小学校4年生から小学校6年生の3年間で急激に減る。また悩みがあっても「何もしない」と答える子どもが増える。「その他」と答えた子どもの自由記述欄には、「自分で解決する」という回答もみられ、中学校以上の学年において増加している。その一方で、「何もしない」という回答が多いのは課題である。

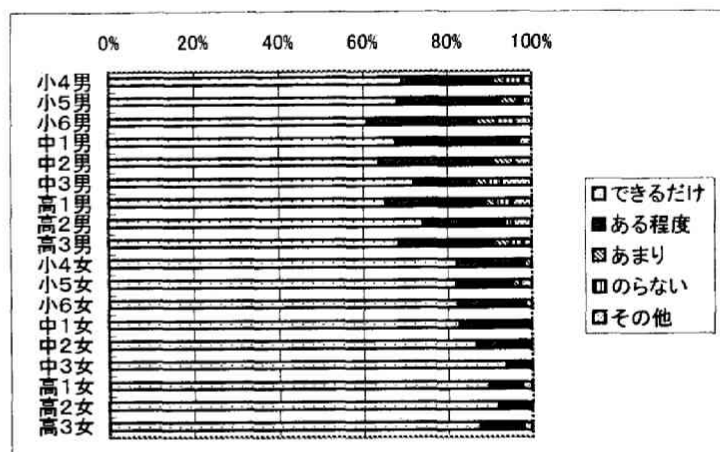
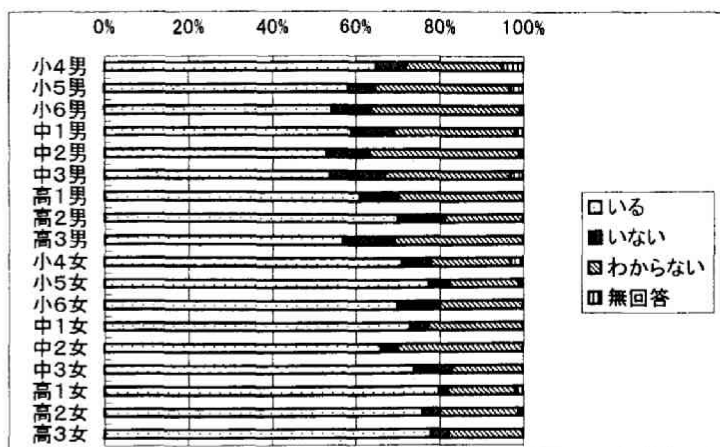
「養護教諭」と答えた子どももほとんどいなく、子どもへの支援を考えていく必要がある。



③ (小学校のみ) 「クラスの男女の仲はいいか」との質問では、各学年とも女子が「はい」と答えた割合が高い。異性に対する意識の違いが男女間で、少なくなることが互いを理解する上で重要なことだと考えられる。



④ (中学、高校のみ) 「同性と異性のつきあい方」についての質問では、男子は学年が上がるにつれ「違う接し方をする」が増加、女子は学年が上がるにつれ、「同じ接し方をする」が増加し、逆の結果が出た。この意識の違いが少なくなることが互いを理解する上で重要なことだと考えられる。



⑤ 「相談できる友達がいるか」との質問では学年による変動が少なく、男子の60～70%、女子で70～80%が「相談できる友達をもって」と答えた。その中で中学生男子は相談できる友達がいる割合が低く、悩みがあっても「何もしない」と答える子どもが多いのと同様であると考えられる。

⑥ 「他から相談されたらどうするか」との質問には学年別の変動が少なく、男女とも「できるだけ相談にのる」が一番多い回答であるが、男子は「ある程度相談にのる」の回答も多く、「あまり他者と深くかわりたくない」子ども像が考えられる。全体の数値は「相談できる友達はあるか」の回答と酷似している。相談できる友達がいる子どもほど、自分が相談される立場になったときに相談にのってあげようとする傾向が見られる。

(7) 調査仮説の検証

- ① 児童・生徒の悩みやその悩みを相談する相手は学年や性別により異なっている。
- ② 小学校でのクラスの男女の仲が良いと答えている児童の割合は高い。
- ③ 中学・高校では学年より性別によって異性に対する接し方の違いが現れた。
- ④ 男子に比べ、女子の方が相談できる友達をもって。
- ⑤ 友達から相談されれば相談にのるという児童・生徒の割合も高い。

(8) 研究仮説の設定

以上のような調査結果を踏まえ、研究仮説を以下のように設定した。

児童・生徒が抱えている性に関する悩みや問題点を明らかにし、保健室の機能や養護教諭の専門性を生かした相談活動を進めることで、自他を大切にしたい行動選択、問題解決ができる児童・生徒を育てることができる。

2 実践研究の視点

児童・生徒の自他を大切にしない意識や主体的な行動選択能力の乏しさは、今日様々な場面で問題とされている。児童・生徒の成長過程の中で、自他を尊重し、同性・異性との望ましい人間関係を築き、性に対する正しい理解と認識を確かなものにさせることは、現在及び将来の生活において直面する諸問題に対して適切な行動選択・問題解決を行う上で重要である。自他を大切にした行動選択・問題解決ができる力を育てるためには、児童・生徒一人一人の発達段階に応じた性教育が必要である。また、一人一人の個別の課題に対応するためには、保健室における相談活動等個別に対応し、指導することも大きな意味をもつものである。

児童・生徒へのアンケート調査により、日常の生活において児童・生徒は多くの悩みを抱えている事がわかった。しかし一人で抱え込んでいたり、自らは何もしていない場合も多い。悩みを相談する相手としては友人や親など身近な人が多く、生徒が自ら保健室に来るのを待っているという従来の保健室相談活動の在り方では、学校によっては問題を抱えていても来室しない児童・生徒がいることも考えられる。また、悩みを抱えた児童・生徒が来室しても保健室には種々の目的での来室者がいるために、相談に対して十分な時間をとることが難しいという問題点もあった。そこで児童・生徒が、個々に抱えている性に関する悩みや問題点を明らかにし、保健室のもっている相談機能を積極的に伝えることで、問題を抱えていても来室しない児童・生徒の意識の啓発を試みた。また、児童・生徒一人一人の発達段階に応じて、個別に指導することができる保健室の機能や養護教諭の専門性を生かした予防的かつ実際の相談活動の在り方を工夫することが重要であると考えた。

これまで保健室で対応していた子どもたちの「性に関する相談」の現状は下の表のようにまとめられる。このことに調査研究から明らかになった点を加えて、各校種での発達段階に応じた個別指導の在り方及び実践方法を検討したものである。

校 種	相談件数	相 談 内 容	実 践 上 の 課 題
小学校	他の相談に比べて少ない	初経、精通など体つきの変化や性機能の発達に関するものがほとんどである。 性被害にあったなど。	「性」を広義にとらえ、人間の生き方にかかわる問題であり、特に潜在化する人と人とのふれあいや人間関係の問題を放置しないように働きかけていく。
中学校	多い	月経や射精など体つきの変化や性機能の発達に関するものから性被害、妊娠など幅広い。	一斉指導では絞りにくい問題も、保健室では個別に対応できる。 相談件数、他の来室件数とも多い現状において、いかに子どもたちの抱えている問題に適切に対応していくかが課題である。
高等学	多い	性交、妊娠、STD など。	複雑かつ微妙な問題が多いので、一人一人が抱えている問題に対応した実践をすることが課題である。また他機関との連携をどう進めていくかが課題である。

(1) 小学校

小学校では、自分で抱えている悩みを一人で抱え込まないで、誰かに相談することで心が楽になる。また、どんな悩みでも誰かに相談することは恥ずかしくないことを理解させる。また、人間関係のつくり方が未熟なため、同性・異性とかかわる中でささいなことで気持ちの行き違いが起こることが多い。そのため、相手との関係を崩すことなく自分をどう主張したらよいかというコミュニケーションスキルを身に付けさせることが大切だと考えた。そこで、児童自身が自分の心の問題に気づき、見直し、前向きに考えられる姿勢を身に付けさせるために以下のことを実践した。

- ① 相談することは大切なことということを伝えるために、児童保健委員会による相談を周知する集会を開いた。
- ② 児童が気軽に保健室に来室しやすいように養護教諭の動静表を掲示し、相談日の予約を受け付けた。
- ③ 児童自身が心の問題を考える手立てとして、グループカウンセリング等の教育相談的な手法を用いて体験的な指導をした。

(2) 中学校

中学校では、生徒のアンケート結果から把握した質問に対する答えをカード形式の「QアンドA」にして保健室前に掲示することで、周囲の友達が抱えている不安や問題を知り、相談しやすい環境を整備した。また、「QアンドA」をきっかけにして、特に保健室で多く聞かれた悩みや質問について、グループでの相談活動に結びつけていった。同世代の悩みを共有化するために、生徒のグループ相談を行う際は他の学年から出てきた事例も活用した。このことで、生徒がお互いを認めあい大切にしようとする意識をもち、育てることになるのではないかと考えた。

自分から悩みを言えない生徒には、何かきっかけを与えられる工夫として「来室者カード」を活用した。また、養護教諭の動静表を掲示することで、生徒が主体的に相談がしやすくなるように工夫した。

(3) 高等学校

高等学校では、悩みに直面してはじめて来室する生徒が多いことから、学年ごとにテーマを設定した相談活動を実践することにした。日ごろ生徒から相談を受けることの多い事項の中からテーマを選んで校内に広く呼びかけた。設定したテーマについて不安や関心をもつ生徒の来室を促すことによって、より多くの生徒に保健室の相談機能に気付かせ、さらに予防的な相談活動を行うことができると考えた。

来室した生徒に対しては、個別に相談に応じるだけでなく、希望者にはグループでの相談活動に参加させた。ここでは、共通する関心事をもつ生徒同士がともに話し合い、性に対するさまざまな考え方に触れることができるようにした。また、ロールプレイングを用いて相手の立場に立って考えることや自分の意志を決定する過程を体験させ、その中で自他を大切にしたい行動選択・問題解決ができる力を育てることをねらいとした。

3 保健室の相談機能を子どもたちに周知する実践

調査研究の結果から年齢が上がるにつれて「悩みをどうしますか」の問いに対して、「何もしない」が増えてくる。これは、人間関係の複雑さから自分の抱えている悩みをどのように対処してよいのか、また、こんなことを誰かに相談したら恥ずかしいなどの気持ちの葛藤と考えられる。そこでまず、保健室の相談機能を子どもたちに周知する取組を以下の表のような方法で各学校の実態にあわせて実践した。

(1) 校種別実践項目

実 践 項 目	小 学 校	中 学 校	高等学校
① 児童保健委員会による集会発表	●		
② 養護教諭から支援の必要な生徒へ声かけ		●	●
③ グループ相談活動実施のお知らせ配布、掲示	●	●	●
④ 相談の動機付けの「QアンドA」の掲示	●	●	●
⑤ 養護教諭の動静表の掲示	●	●	●
⑥ 保健室来室カードの工夫	●	●	●

(2) 取り組み方法と児童・生徒の反応

① 児童保健委員会による集会発表

保健委員会の児童に、養護教諭が作成した台本「一人で悩まないで」を読み聞かせ、集会での発表を働きかけた。係分担をおこない準備を開始した。保健委員会児童に台本を読み、内容に真剣に聞き入っている様子が見受けられた。劇を発表することに意欲的な発言が多く聞かれた。

集会終了後4、5、6年生に感想を書かせた。4年生には内容が少し難しいのか「よくわからない」と答えた児童が4分の1位いた。5、6年生では、ほとんどの児童が理解出来た様子で、「口に言い表せないものを感じた」「悩んでいる人の気持ちが理解できた」等があり、相談することの大切さを理解できた様子だった。

劇「1人で悩まないで」のあらすじ

原宿でモデルにスカウトされたが、本物のスカウトなのか、偽物のスカウトなのか不安な気持ちを誰にも相談出来ないA子。友だちにゲームセンターに誘われたが、断ることの出来ないA男、二人とも身体の具合も悪くなってきた。この二人はどうしたらよいのだろうか？

② 養護教諭から支援の必要な生徒への声かけ

養護教諭が日常生活の中で、子どもたちが性に関して、興味本位に話題にしていたり、何か悩んでいる様子がうかがえたり、様々な場面に遭遇することがある。そこで積極的に声かけをし、一緒に考える機会（場所、時間）を設定する必要があると考えた。

自分から話すことの苦手な生徒、相談内容によって話すことを躊躇している児童・生徒等に、養護教諭が声かけをしたことによって、「スッキリした。自分だけ悩んで

いたんじゃないかった。楽しかった」等の感想が聞かれ、気軽に相談できる動機付けにつながった。

③ グループ相談活動のお知らせの配布、掲示、呼びかけ

担任を通じてグループ相談活動実施のお知らせの配布、校内掲示、保健室を訪れる児童・生徒等への呼びかけをとおして、内容、方法について積極的に広報に努めた。

グループ相談活動について、知らない児童・生徒が多く、「保健室の先生はこんなことやっているんだ、悩みの相談にはこんな方法もあるんだ」等、興味・関心を高めることができた。

④ 相談の動機付けの「QアンドA」の掲示

調査研究で生徒に質問した「大人へ近づいていくあなたの心とからだには、いろいろな変化が起きています。性に関する問題で悩んでいる事があれば書いてください」について、不安や質問、疑問が多く記載されていた。そこで、これらに答える形の解りやすく、興味を引く内容を工夫した掲示物を作成した。この掲示物をきっかけに性に関する不安や悩みをもつ他の相談者が多く来室できることを期待した。また、「背はよく寝ると伸びるの？」等資料を見た児童・生徒が再確認に訪れたり、友達同士の話題になったりして、不安や質問、疑問の解決に役立った。

⑤ 養護教諭の動静表の掲示

週単位で養護教諭の動静表を保健室入口に掲示した。これにより、相談できる時間が児童・生徒に明らかになり、安心して相談に訪れることができた。

今まで相談に訪れなかった児童・生徒も気軽に「先生、今日は出張だよね、でも明日は居るよね、明日相談に来てもいい？」と声を掛けて来るようになった。このことは、「いつでも相談に来て良いんだ」という意識の変化ととらえることができた。

⑥ 保健室来室カードの工夫

内科的症状を訴えて来室した児童・生徒に「今悩んでいる事がありますか？」の設問の入ったカードを書かせた。「悩みがある」と回答した児童・生徒には時間をかけてゆっくり話し、その様子を観察し、身体的症状の背景には心理的な要因が関係している場合もあることを話してみた。

悩みが身体症状として現れることもあると理解すると、児童・生徒は、身体のつらさのためか、悩みの内容に少しずつ触れてきた。話をしたり、安静に身体を休めたりすることにより身体的症状も回復し、気持ちも落ち着いてきた。このきっかけが、次の相談活動に結びついた。

4 相談活動の実践

[小学校]

(1) 実践内容

① 休み時間、給食の時間、昼休みの時間、放課後などを活用した相談活動

小学校高学年になると、身体的な成熟に伴う発育・発達とともに、心の発達段階では異性を意識し始める時期を迎える。しかし、人間関係のもち方が未熟なため、同性・異性とかかわる中で、ささいなことで気持ちの行き違いが起こることが多い。そこで高学年を対象に少人数のグループで、日頃の男女の人間関係でよくある問題をテーマに話し合わせた。そしてロールプレイングやグループ相談活動などを行い、お互いの感想を聞き合うなど体験的な活動を取り入れた。

展 開	具 体 的 内 容	指 導 上 の 留 意 点
気持ちをほぐし話しやすい雰囲気をつくる。	・グループエンカウンターショートエクササイズをする。(例)肩もみエンカウンター あれ?はなれない!など	・なるべくふだん話したことのない友達とペアになる。
ブレインストーミングをする。	・異性から「言われていやなこと」「されたくないこと」について自由に話し合いをさせる。	・話し合いの内容を発表し合い、共有化を図る。
話題にそって進める。	・ロールプレイング、一人の体験についてグループ相談活動をするなどの方法で、解決の方法をみんなで考える。	・話題によっては自由に自分の意見を出させるだけでもよい。
今日の感想を書く。	・記入用紙を準備し、感想や意見を書かせる。	・感想を掲示し、共有化を図る。

② 教育相談部の「何でもそうだん日」を活用した相談活動

児童が悩みを抱え込まないで、本音で話せる場を設定し、教師が問題の実態をとらえ解決のための指導に役立てる。これを目的として、生活指導委員会の取り組みに「何でもそうだん日」があり、養護教諭も生活指導委員会に所属している。

数日前から「何でもそうだん日」実施のポスターを掲示し、当日は校内放送で呼びかける。相談員は生活指導委員会の教師が交替で行い、1回に2～3人であたる。実施回数は学期中に2回位行い、実施時間は午後3～4時、相談員1人に1部屋が割り当てられる。

(2) 評価の観点

- ① グループで話し合う中で互いの立場や気持ちを考えることができたか。
- ② 互いに相手のことを考えた言葉づかいや行動をしようとする意識が育ったか。
- ③ 悩みを誰かに相談することで、問題解決の手掛かりに結びついたか。

(3) 分析と考察

① 休み時間、給食の時間、昼休みの時間、放課後などを活用した相談活動

グループによって差はあったが、児童の多くが積極的に意見を言うことができていた。少人数で場所も教室とは違った環境ということが、会話が円滑に行われたことにつながっていたと考える。しかし、事前指導が十分ではなかったため、少数ではあるがロールプレイングに抵抗を示す児童がいた。

男女が互いに相手の直してほしいことについて、自由に意見を出し合った。進める中で、同じ意見はまとめて、話題を一つにしぼり、養護教諭がリーダーシップをとった。終了後、「すっきりした。」という感想をもった児童が多かった。話し合いの進行はまだ未熟ではあるが、自分を表現できたこと、相手に共感してもらえたという点で児童は満足感をもったと考える。さらにそこから「相手の気持ちを考えたい。」「その人が言われていやなことなど初めて知ったことがたくさんあった。今度からはもっと考えて言おうと思った。」という感想も寄せられた。自分を相手に理解してもらうことができたとき、相手のことも考えようとする気持ちが芽生えたのだと考えられる。

グループによっては、解決の方法まで話し合うことができた。話題を共有することで連帯感が生まれ、このことに積極的にかかわっていきたいという姿勢が見られた。

② 教育相談部の「何でもそうだん日」を活用した相談活動

相談内容は圧倒的に友達関係が占め、相談者は女子が大半であった。時には「男の子には良い顔を見せていて、女の子には違う態度をとる人がいる。その態度が許せない。」など異性への関心の芽生えととらえられる話も聞かれた。また開始前から部屋の前で待っているなど、積極的に相談に臨む態度がうかがえた。このことから、児童はこの時間を心待ちにしていると考えられる。

一人で悩まず、誰かに話すことで気持ちが整理できたり、時には解決できたりすることが可能な身近な相談の機会として「何でもそうだん日」の取り組みは意義があったと考えられる。

[中学校]

養護教諭は、保健室において一人一人の生徒から悩みを聞く機会が大変多くある。しかし、アンケート調査から、悩みや問題を抱えていても、誰にも相談をしない生徒がいることがわかった。このことから、生徒からの相談を待つだけでなく、誰にも相談しない生徒へ向けて呼びかけをする必要性を感じた。そこで、生徒から出された悩みや問題を生徒同士が話し合うことにより、互いを理解し、認め合い、自ら問題解決へ導くことができるようになることを目的に、次の2例のグループ相談活動を試みた。

(1) 希望者を対象とした保健室での相談活動

展 開	相 談 活 動 の 工 夫	具 体 的 内 容
募集・呼びかけ	・掲示物を作成し、校内に掲示する。 ・配慮を要する生徒に声をかける。	・成長、男女関係、性に関する悩みや関心をもつ生徒を集める。
希望者への説明	・保健室において説明する。 ＊事例 1年 男女の人間関係 (学年別) 2年 痴漢にあったら 3年 性感染症(エイズ) ・妊娠	・生徒から成長、男女関係、性に関する悩みや問題を聞き取り、相談活動の事例を選択する。 (事例の選択が難しい場合は、事前に用意した左記の事例を用いる)
相談活動の実践	・事例について話し合いをさせる。	・5～6人のグループで事例をもとに話し合う。(司会は生徒)
評 価	・話し合いの後、質問紙でアンケートを行う。	・感想(体験後、自分の考えがどのように変化したか)

(2) 生徒保健委員会を活用しての相談活動

展 開	相談活動の工夫	具 体 的 内 容
保健委員会活動①	・委員会活動の中で話し合いをする。	・学年別に成長、男女関係、性に関する悩みや問題について話し合う。（事前に養護教諭が用意した事例を用いて話し合う。） ・事例：男女交際
保健委員会活動②（相談希望者の募集、呼びかけ）	・①で体験したことを全校生徒に広める。	・保健委員会便り、掲示物（ポスター）により相談希望者を募集する。
保健委員会活動③（相談活動の実践）	・保健委員会生徒を中心に希望して集まった生徒と話し合いを行う。	・司会、記録は生徒。5～6人のグループ相談活動を行う。（養護教諭は助言者） ・事例：痴漢にあったら
保健委員会活動④（相談活動実践報告）	・相談活動を行ったことを全校生徒に知らせる。	・保健委員会便り ・掲示物（ポスター）

(3) 評価の観点

- ① 生徒の悩みや問題について、一人一人が考えを深めることができたか。
- ② 生徒から出された悩みや問題について、生徒同士で解決することができたか。
- ③ グループで話し合うことにより、生徒がお互いを理解し、認め合うことができたか。

(4) 分析と考察

希望者を対象とした保健室でのグループ相談活動では、成長、男女関係、性に関する悩みや関心をもつ生徒を養護教諭が募集した。実践後の生徒の感想から、「自分が何を悩んでいるのか言えてよかった」という声が多く出された。また、友だちがその悩みを克服するために努力する話を聞いて、「自分がこの立場だったらどうするだろう」と、今後の自分の対処方法についても発展して考えることができた。この相談活動は、自分の成長における悩みを周囲の人が真剣に聞いてくれるという点で有効であった。

生徒保健委員会活動を活用してのグループ相談活動では、相談活動を実践するに当たり教職員との連携を図った。この相談活動のねらいは生徒同士で悩みや問題を解決することであり、そのためには保健委員を話し合いのリーダーに育てる必要があった。

まず、生徒同士による相談活動の方法や意義、司会進行や記録の仕方を事前に指導した。この相談活動については、テーマに興味・関心のある生徒が集まったことなどから、自分の考えや気持ちについて活発に意見交換ができた。実践後の生徒の感想から、「自分以外の人の意見を聞くことができてよかった」「こんな時、こうすればいいんだ」と、お互いを理解し、自分の考えを深めることができたという点で有効であった。

この2例のグループ相談活動の実践で共通することは、司会進行役を保健委員が行ったことで、生徒同士の自由な発言と自主性を尊重することができたことである。しかし、司会の生徒が話し合いの展開を円滑にできず、養護教諭が助言する場面も多かった。グループ相談活動の中心となる生徒の育成は、この相談活動にとって重要なポイントである。その育成の方法や内容については、今後、さらに研究を深める必要がある。また、養護教諭にとっても生徒理解が深まるなど保健室の機能を積極的に活用できた。

〔高等学校〕

(1) グループ相談活動の実践

多様な悩みを抱えている生徒に対して、相談活動の場としての保健室をより開かれたものにし、事態が深刻化する前の予防的で積極的な相談活動を行うことが重要であると考え、下表のような計画を立て、行事等のない日の放課後に実践した。

なお、ロールプレイングの計画立案にあたっては、「ロールプレイングによる演習の進め方」（平成11年度保健室相談活動研修会資料）を参考にした。

【グループ相談活動の計画】

展 開	相 談 活 動 の 工 夫	具 体 的 な 内 容																								
募集・呼びかけ	①ポスターを作成し、校内に掲示する。 ②気になる生徒に声をかける。	・悩み・不安・興味をもつ生徒を募集する。																								
希望者への説明	③各々に保健室において説明する。	・相談活動の意義を話し、その中で、ロールプレイングという技法を用いた活動に参加したいという生徒を募る。 ただし、この技法に抵抗のある者については、従来通り、個別の相談活動に切り替える。																								
相談活動の実践	④ロールプレイングの技法を用いる。	保健室相談活動において、有効なコミュニケーションスキルや対人関係スキルを体験させる。 テーマ：1年「男女交際」 2年「不特定多数の異性との交際」 3年「妊娠」 <table border="1"> <thead> <tr> <th>段階</th><th>時間</th><th>相談活動の内容</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="3">導入</td><td>1分</td><td>・相談活動についての説明</td></tr> <tr> <td>1分</td><td>・ロールプレイングについて説明</td></tr> <tr> <td>1分</td><td>・シナリオを読み、役割決定</td></tr> <tr> <td rowspan="5">展開</td><td>3分</td><td>・ロールプレイングの実習</td></tr> <tr> <td>5分</td><td>・感想発表</td></tr> <tr> <td>1分</td><td>・役割交代</td></tr> <tr> <td>3分</td><td>・ロールプレイングの実習</td></tr> <tr> <td>5分</td><td>・感想発表</td></tr> <tr> <td>整理</td><td>3分 5分</td><td>・まとめ ・アンケート記入</td></tr> </tbody> </table>	段階	時間	相談活動の内容	導入	1分	・相談活動についての説明	1分	・ロールプレイングについて説明	1分	・シナリオを読み、役割決定	展開	3分	・ロールプレイングの実習	5分	・感想発表	1分	・役割交代	3分	・ロールプレイングの実習	5分	・感想発表	整理	3分 5分	・まとめ ・アンケート記入
段階	時間	相談活動の内容																								
導入	1分	・相談活動についての説明																								
	1分	・ロールプレイングについて説明																								
	1分	・シナリオを読み、役割決定																								
展開	3分	・ロールプレイングの実習																								
	5分	・感想発表																								
	1分	・役割交代																								
	3分	・ロールプレイングの実習																								
	5分	・感想発表																								
整理	3分 5分	・まとめ ・アンケート記入																								
評 価	⑤ロールプレイング後に質問紙法でアンケートを行う。	・「ロールプレイング」という技法についての感想 体験後の気持ちの変化についての感想																								

保健室におけるグループ相談活動の実施を知らせるポスターを掲示し、全校に呼びかけるとともに、性に関する心配事を抱えた生徒に声をかけて参加者を募った。参加を希望した生徒たちには、あらかじめロールプレイングの進め方と意義について説明し、さまざまな立場に立って物事を考えることの重要性を理解させた。当日の導入の中でも、演技の上手下手や解決に到るかどうかは重要ではなく、役になりきってその人の立場や価値観を考え演じることが大切であることを強調した。演技の途中には、養護教諭は、指示や助言をできるだけひかえ、生徒に自由に演技させるように心掛けた。演技後の感想発表の場面では、表現することで自分の考えを深めることが、この相談活動の最も重要な段階であることを理解させた。

(2) 評価の観点

- ① 自分たちが演じてみることで、それぞれの立場や価値観を考えることができたか。
- ② 性行動における行動選択について、考えが深められたか。

(3) 分析と考察

事前の説明によって、生徒たちはグループで話し合うという相談方法の意義をよく理解しており、どの学年でも真剣な取組がみられ、また、進行も円滑であった。

演技開始の時点では、恥ずかしさもあるせいかうまく始められず、養護教諭が最初の一言を言ってきっかけを作ることが必要なグループもあった。しかし、演技の中では、「気持ちが分からない」、「異性の気持ちになれない」と言葉に詰まりながらも、一生懸命役割を演じることを通して、その人の置かれた立場を理解しようとしていた。

演技後の話し合いやアンケートでも、「確かにこういう人もいるが自分ならどうするか考えた」、「いろいろな立場の人がもっとよく話し合った方がいい」、「友人役の説得をきいているうちに、自分のことを大切に思ってくれていると感じた」、「自分がそういう立場に立ったときどうするか、今後考えようと思った」などの感想が聞かれ、互いの立場を理解し、思いやることの大切さや自分の行動選択の在り方を考えるきっかけとなったことがうかがえた。また、「中絶は、絶対ダメだと思っていたが、自分の立場も考えなくてはならないという問題に気が付いた」と男子生徒が書いたことは、自己の価値観を見直す機会になったことを示している。

ロールプレイングの実践における工夫として、「同じ立場におかれても、人によって違う意見が聞けてよかった」、「観察者になると互いの立場を冷静に見られて、相手の気持ちを考える必要があると分かった」という感想からも、役割を替えて複数回演技をすることは、大きな意味があった。特に、性の問題に関して異性の意見を聞いたり、異性の立場に立って考えたりする体験が貴重と考えられ、実際にも男女合同のグループで相談活動を行った方が話し合いの幅が広がった。さらに台本に工夫を加えるなどにより一層生徒の考えを深めることができると考えられる。このように、ロールプレイングの手法を用いたグループ相談活動は、生徒が自発的に悩みや不安について考えるきっかけとなり、予防的な相談活動としての効果が認められた。

来室する生徒を待つ対応型の相談活動だけではなく、積極的な予防的・開発的な保健室相談活動の実践をさらに進めていくことが大切であることが分かった。

V 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 調査研究の結果から、子どもたちはどの学年も共通して友達のことでは悩んでいるが、その解決に対して、養護教諭の役割はあまり活用されておらず、何もしない子どもが特に中学生の男子に多いことが分った。また、中学生の男子は、相談できる友達をもちいる割合も、友達からの相談にのる割合も低いことが分った。

これらのことから、相談の焦点を中学生の男子に当てる必要があるが、人間関係は相対的なものなので、中学生の男子だけに限らず、より積極的に子どもたちの人間関係を円滑に築いていくための支援を行う必要があることが分かった。

- (2) 保健室の相談活動を周知する実践として、小学校では、児童保健委員会による集会発表をしたり、「何でもそうだん日」のポスターを掲示したりした。

中学校・高校では、相談者募集のポスターを掲示し、支援の必要な生徒には養護教諭が声をかけ、生徒の来室を促した。

その結果、実際の相談活動につなげていくことができた。特に、今まで性に関する相談件数の少なかった小学校でも、相談を行うことができた。

- (3) 保健室の機能や養護教諭の特性を生かしたグループ相談活動として、小学校では、教育相談的な手法を用いた相談活動や校内の「何でもそうだん日」を活用した相談活動を行った。

中学校では、保健室でとらえた生徒の悩みや質問を、保健委員会の相談活動や希望者を対象とした相談活動に結び付けていった。

その結果、少人数で話し合うことにより、活発に意見交換ができ、互いに認め合い大切にしようとする意識をもつよい機会となった。そして、「もっといろいろな人の悩みを聞いてあげたい」「もっとみんなで考えたい」と子どもたち同士の相談活動の輪が生まれてきた。そして、その活動の中心に、どの学年の児童・生徒でも来室できる開かれた空間である保健室が重要な位置付けをしていることが分かった。

- (4) 児童・生徒が相談に来やすい環境整備をしたり、相談活動に活用できる資料を作成したりする実践を通して、調査研究から把握した質問に対する答えを「QアンドA」にして掲示し、相談の動機付けとなるようにしたり、養護教諭の動静表を掲示したり、児童・生徒が相談に来やすいようにしたりした。

その結果、児童・生徒と話すきっかけが作りやすく、相談活動も円滑に行われるようになった。

2 今後の課題

- (1) 担任・保護者・専門相談機関とのよりよい連携についての研究が必要である。
- (2) グループ相談活動を助言する教師の資質向上や子どもたち同士で話し合わせる場合のリーダーの育て方についての研究が必要である。
- (3) 深刻な課題をもった子どもにも相談しやすい環境づくりのため、多様な相談方法についての検討が必要である。

終 章 研究のまとめと今後の課題

I 研究のまとめ

今年度の学校保健部会は、研究主題「生涯を通じて健康な生活を送ることのできる児童・生徒の育成、副主題：実践力を育てる性教育の展開と指導の工夫」に基づき、これまでの学校種別の分科会に変えて、小学校、中学校、高等学校合同で2つの分科会を構成し、児童・生徒の発達段階や特性及び学校種間の連携や指導の継続性に視点を当てて研究を進めた。

特に昨年の成果を踏まえつつ、引き続き性教育を取り上げ、今年度は新学習指導要領で強調されている男女相互の望ましい人間関係の在り方について、調査研究によりその実態や課題を明らかにするとともに、実践研究において具体的な指導の展開及び指導内容・指導方法の工夫・改善に取り組んだ。

調査研究では、児童・生徒を対象に対人関係の実態や集団の中での存在感、不安や悩みとその解決方法等について明らかにし、研究仮説を設定した。

さらに対人関係のスキルを高めるための授業の在り方、保健室を基盤とした健康相談活動の在り方について具体的かつ実証的に研究を進めた。

第1分科会では、調査研究により自己有用感や他者への信頼感が強い子どもほど、対人関係における調整的な対応をとることができる傾向が明らかになった。このことを踏まえ、子どもたちが現在あるいは将来直面することになる異性との人間関係の在り方について、適切に対処できる資質や能力を身に付けることができるよう事例研究という手法を用いて授業を展開した。さらに子どもたちが自らの問題として主体的に考え、思考・判断し、行動を選択していく過程を取り入れた授業を通して、対人関係スキルの基盤となるコミュニケーション能力を身に付けられるよう工夫した。

第2分科会では、調査研究の結果、保健室のもつ相談機能が必ずしも子どもたちに十分活用されていない実態や子ども同士の人間関係を生かした相談活動を工夫することの必要性が明らかになった。このことから、来室する児童・生徒への対応を基盤とした従来の相談活動に加えて、保健室の機能を積極的に広報する活動や保健委員会の生徒や希望者を対象としたグループ相談活動を行うなどの積極的な取組を通して、子どもたちが性にかかわる対人関係の悩みや不安を自らの力で解決できるよう工夫した。

両分科会とも授業やグループ相談活動後の子どもたちの感想やワークシートの記述内容等から、研究仮説に基づいた実践は肯定的に受け止められた。なお、子どもたちの変容については、今後さらに実践を続けることによって、より明確かつ顕著なものとする可以考虑。

II 今後の課題

- 1 新学習指導要領の趣旨を踏まえた性教育全体指導計画の策定と全教職員が一体となって取り組める校内指導体制の整備・充実が必要である。
- 2 子どもたちが自ら性に関する課題を把握し、解決に向けて主体的に学習に取り組むことができる課題学習の工夫や体験や実習等、多様な学習方法の開発・研究が必要である。

平成12年度

東京都教育研究員(学校保健)研究報告書

担 当 東京都教育庁体育部体育健康指導課
指導主事 薄 井 和 久
指導主事 牛 島 三重子

〒163-8001 東京都新宿区西新宿2-8-1
電 話 03-5320-6887



古紙配合率70%再生紙を使用しています